小特集・古代文学研究の現状と展望

〈古代の古代〉の言語表現のモデル化が必要

工藤　隆

江戸期の国学以来、日本古代文学研究に欠落しているのは、縄文・弥生まで視界に入れた〈古代の古代〉の言語表現の具体像である。古事記は、七〇〇年代という、古代でも画期的に新しい〈古代の近代〉の作品なのだが、本居宣長『古事記伝』はその内容のすべてを〈始原の古代〉だとした。しかし、宣長に対する敗戦後の批判は主として歴史社会学の視点からのものだったので、古事記以前の日本列島民族（ヤマト族）の言語表現のモデル化の欠如という弱点はほとんど問題にされぬまま、現在に至った。これは、文学研究は文字文献の範囲内に限定すべきだという文献至上主義への偏向によっても助長された。

しかしそれでは古事記以前が資料的にほとんど空白になってしまうので、本土の民俗事例やアイヌ・オキナワの口誦文化からのモデル化の試みが出てきた。しかし、本土の民俗事例のほとんどは、〈古代の近代〉に基礎を与えられた中世以後のものだったので、近年の古代研究は徐々に中古・中世研究との区別が曖昧になりつつあるし、アイヌ・オキナワだけでのモデル化にも限界があった。一方、日本文学研究は資料の対象を日本の国境の内側に限定すべきだという〝国境の内側主義〟も支配的だ。〈古代の古代〉の日本列島文化は、現在の国境とは別のアジア全域のなかで形成されたのにである。古代中国の〈国家〉側の文献との文献主義的な比較研究は進んだが、アジアの少数民族文化との比較研究はほとんど進展しなかった。

〈古代の古代〉のヤマト族文化のモデル化には、アイヌ・オキナワを含むアジアの少数民族と〈国家〉との関係の、過去と現在を把握することと、歌垣など実用的な歌掛け文化やメロディーに乗せて歌う〈韻文としての神話〉の実態（現場）を知る必要がある。その際に重要なのは、その言語表現のあり方をできうるかぎりその少数民族の言語に添って忠実に記録し、また、歌垣や神話が村落の生活のなかでどのように機能しているのかという〈生態〉に迫ることである。したがって、これからの日本古代文学研究者に求められる基礎能力は、作品そのものおよび日本側諸資料の読みを深めるのは当然として、一方で現代中国語に習熟すること、また中国以外のアジア地域の調査のため英語に習熟すること、さらに古代中国語音韻論を学ぶこと、そしてヤマト語・古代朝鮮語を含む少数民族語を理解するため言語学特に国際音声記号を学ぶことである。幸いなことにコンピューターによる資料操作の精密化、高速化、資料範囲の拡大化が予想以上の速さで進行しつつあるので、既存の文字資料での伝統的な基礎作業的研究の大部分を、いずれはコンピューターが代行することになるだろう。省力化されたエネルギーは、少数民族文学としての日本古代文学作品の本質把握の深化と、〈古代の古代〉への探求に振り向ければいいのである。